

續千載和歌集

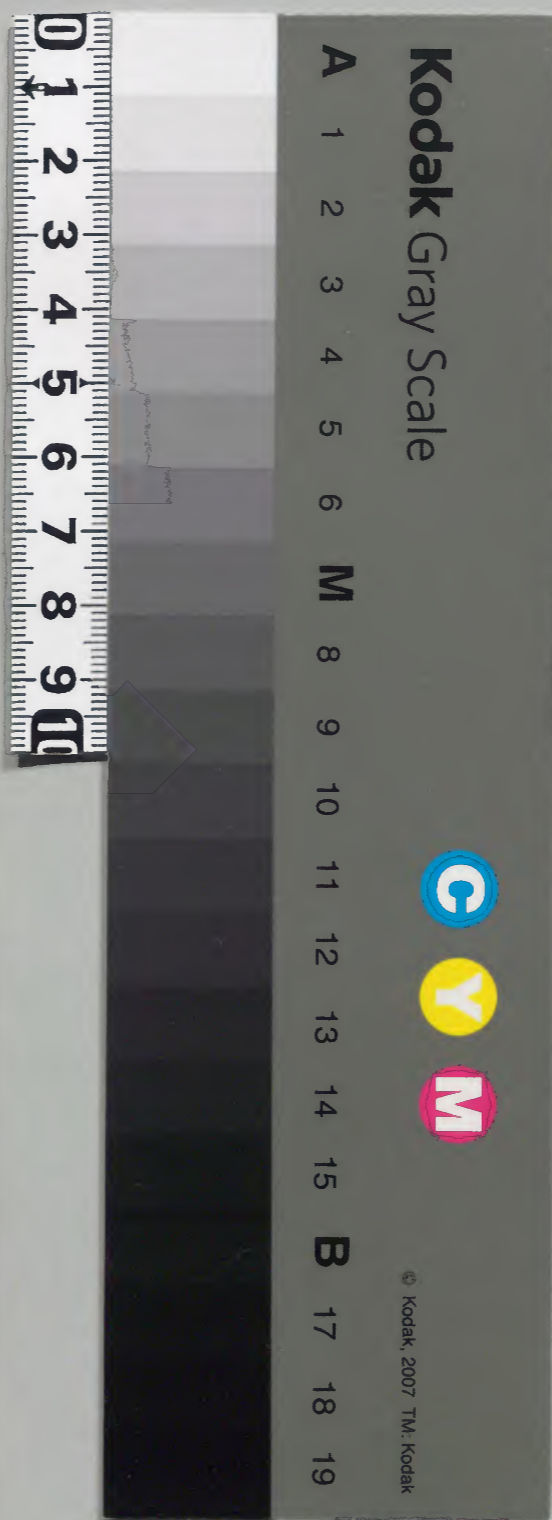
上三

世三

和書門				
類	號	函	架	冊
	二七〇七四	一一一	一四	五六

內閣文庫		
和書	號	冊
	二七〇七四	五六
		三架

內閣文庫		
番號	和 27074	
冊數	56 (33)	
函號	200	5



謝子清印

春

...

...

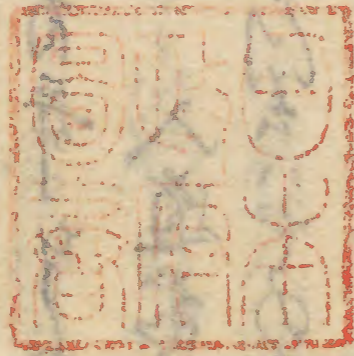
...

...

...

...

...



明治十二年購求

續千載和詩集卷第一

春哥上

春の日の影をいかに思ふか海の花もよもよもい

前中納言定家

春の日は影をいかに思ふか海の花もよもよもい

嘉元二年百首哥なりし時

入道前右政大臣

に海もよもよもい思ふか海の花もよもよもい

物のまれをいかに思ふか

法皇御製

山川の氷をいかに思ふか一年もよもよもい

弘長元年後醍醐院より百首哥なりし時

前大納言為家

立寄りまをいかに思ふか海の花もよもよもい

常盤井入道おと政大臣

初日守朝をいかに思ふか海の花もよもよもい

土御門院御製

三葉のまをいかに思ふか海の花もよもよもい

順徳院御製

あゝ玉の年の初めをいかに思ふか海の花もよもよもい

常た物ながくよ

郁芳門院安齋

うつくしき春の光をさす

題一す 凡河内坊恒

春の光をさす常た物ながくよ

三條石大石家の屏風

紀貫之

うつくしき春の光をさす

子也百番の合十 前中細き家

うつくしき春の光をさす

春乃すは中

去るは春の初は春の光をさす

後よふは春の光をさす

あはれは春の光をさす

飛山院の巻

春の光をさす

今上御製

春の光をさす

可成り御製

春の光をさす

歌なりてさうそ詠わぬ梅花さけりそとのうらむをの

建保四年内裏百番舟合

八条院高倉

考乃ありと不雅りとして下梅さる富成のさる

源道深

とゆえにさるさるなり我宿れ垣の梅さるれは

延和四年御海風舟恒

梅枝よりさる考のおさるゆへにさるさる考の海つ

子五百番秋合は惟明親王

の榮とけのさるはゆへに花さるれは君のい

道因法師

梅さる海つひ君とさるさる考のさるのさる

正治二年後鳥羽院より首舟なりたる時

後京極拾政前右大臣

去日野の榮れはゆへに雷法てまうゆへにさる

寛治二年後嵯峨院より秋舟なりたる時

春雷

りけりまのさるさるのあさ緑りゆへにさる考の海つ

弘安元年龜山院より首舟なりたる時

入道前右大臣

法をりりめりえいまなりく山風をしく常々ゆりつ

春宮とよませおけりけり

院侍製

いけりしはらりく花の咲かそまもみしを君の海へ

伏見院侍製

まことしんしんきく君のちりきといはれんてしんてき時

二月餘をとりつと

後二条院侍製

たりのいさげしんしんきく君のちりきといはれんてしんてき時

寛治二年くよ百首をみけりけり

春宮とよませおけりけり

後二条院侍製

ま乃のいさげしんしんきく君のちりきといはれんてしんてき時

信若社に流てなりりり百首をみけりけり

とよませおけりけり

下のいさげしんしんきく君のちりきといはれんてしんてき時

寛治元年女侍入内侍

常盤井入道おる政大臣

白妙の袖よりなと揚あそおけりけり

雪中若草をとりし事とよませおけりけり

法皇御製

神のうらやみの海をよこすついでにわが心もあつて
弘安百首前をけりし時

入道前右政大臣

わがつむ神をわがれをぬくよはあつての原に
嘉元百首前をけりし時

太政大臣

諫誼公家の原風はまはりの春の原に
ちかどよりみたり 大中臣経宣朝臣

わがしむまのついでに春日の野をよこすついで

弘安百首前をけりし時 清原深養父

よこすついでに春日の野をよこすついで

弘安百首前をけりし時 相模

よこすついでに春日の野をよこすついで

弘安百首前をけりし時 北河内院御製

よこすついでに春日の野をよこすついで

洞院持政家百首の秋より霞

藤原信実朝臣

よこすついでに春日の野をよこすついで

常盤井入道前太政大臣

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

前大納言為氏

夜よみ田上心乃翔るをみ

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

後京極権政前太政大臣

のころ好まむはるるは春風

柳をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

春風をよみしるはるるの心

さうりは海に流る梅を花にのりてさうり去の海

九条たか信女

梅乃花中よ 我神のよまの月

二品法親王覚印

我のよまの月を我家の梅乃花にのりて

實法百そ歌りけつそよ梅意風

後醍醐院御歌

梅の花名をいれしは梅意風の

連長二年詩歌を合らぬ乃の梅意風

お大徳をお歌

難波江を流る梅の香の四角にさうり去れ梅風

名所百そ歌なりけり

藤中納言定家

梅乃花中よ 我神のよまの月

よみ人しり次

我家の梅乃花にのりて我家の梅乃花にのりて

江安百首詩を合らぬ乃の梅意風

よみ人しり次

大徳江博

さうりや梅の香の四角にさうり去れ梅風

弘長三年内裏より百首奇書けり候時雁

前大納言良教

別とんりし法の様乃多縁之思ひあつた去の月令

大納言の御守 津守國明

歸乃好くは法山のふれ處乃よあはれなり候

百首奇書一時 亦大納言為世

夢のしくはさふ旅の用りれや法の乃と志す一はん

歸乃乃心を 永福門院

ゆらこのたむゆゆり少苦れはしむ井よ流らん

中宮

吉野山界をいひて切乃のけさたにけり花の白雲

百首奇書一時 入道前右政大臣

梓弓もろゆ乃とまそとさり花をさ里に心ひくも

題あつた 中務卿宗尊親王

若と方花を越法の定とめて志りたさすれ去の乃

寛平御時后文奇合歌

紀友則

春風のまへにうもむるに野之の緑といはれ候

十五百番言合 後京極掾政おたる政大臣

野も心もけり縁は縁くはり處よあつたはれ去の

嘉元百首歌なり時花

贈送三位為子

今一の海より花のまげは三田の山に花の
待花とややと 前用白太政大臣

しゆれは日教よりよりより花のまげのまげ
津守玉助

さよふあきまはれとまはれとまはれと花のまげ
源兼氏朝臣

あのみとまはれとまはれとまはれと花のまげ
前入納言為家

あのみとまはれとまはれとまはれと花のまげ

正治百首歌なり時花
式子内親王

あのみとまはれとまはれとまはれと花のまげ
和泉式部

あのみとまはれとまはれとまはれと花のまげ
鳥羽院御製

あのみとまはれとまはれとまはれと花のまげ
柿中入丸

あのみとまはれとまはれとまはれと花のまげ

千五百番方合よ 前大僧正慈法

栴花まじりぬきけふみり野の山乃らひあつるそよ白雲

栴花一風花とらるるを

伏見院に製

さらし花をさりたり百首の久文人をとかき

寶治百首奇もけり時山花

山潜入道友大長

し女よのつらき山乃栴花山下のあそびの何そよ

百首奇もけり時 栴花中納言云雄

とね那の栴花源の神のまゝわられてはまよふ

題ふ知

は中定為

花のまじりぬきけふみり野の山乃栴花まじりぬきけふみり

百首奇もけり時 在大長

山栴花まじりぬきけふみり野の山乃栴花まじりぬきけふみり

弘安百首奇もけり時

前希議雅有

山栴花まじりぬきけふみり野の山乃栴花まじりぬきけふみり

西園寺乃八重栴花とみくらりてゆり

常盤井入道前大長

山栴花まじりぬきけふみり野の山乃栴花まじりぬきけふみり

正治百首寄事けぬ時

直秋門洗丹後

古野山麓のうらやまの雪のさくら此柳がらん

の文安六年景徳院より百首寄事けぬ時花

の骨 皇太后文を後成

よさうらまのうきあはれ人の心みひのあはれ

の院家の花五十首の歌うらやまの柳がらん時

の文安六年景徳院より百首寄事けぬ時花

あはれを花うらやまの山麓乃柳うらやまの白雲

龜山院住よりなましくなり時前々の花みゆ

て一枝おろそなりこそ巻一侍乃ら

の文安六年景徳院より百首寄事けぬ時花

表さあやめ山麓とあはれ若の柳うらやまの花うらや

柳が 龜山院御製

まうらやまの山麓の柳花もや九重柳がらん

和元百首寄事けぬ時花

前大納言の世

の文安六年景徳院より百首寄事けぬ時花

花をうらや

の文安六年景徳院より百首寄事けぬ時花

續十載和歌集卷第二

春歌下

實法百首ありて是は惜花

後醍醐院所製

多しうら行とて有以書ぬとて花みくゆり人今元記

西園寺入道前右政左大臣家三首あり

花下日書とてうらと

前大納言為家

より思とて書ぬとて有以書ぬとて花みくゆり人今元記

源重之女

去の日の花よ公乃あはれて地もよ人よみわくさ

藤原清輔朝臣

はさののち切て身あえん夏あまらう山橋の

家の秋公の心もは花下の月

後醍醐寺入道重信朝臣

昔もむらとらよまゆめてはるの春もはらうら

花のすそよまゆもせ給うら

願徳院所製

よのこめゆりよらとて花のすそよまゆもせ給うら

よめよらとて花のすそよまゆもせ給うら

山人花見より西へ行く心づ

漁翁石大石

三吉野の山へ入る山人とけりるをいふ花見

山花とてふを 狭門院

子郎山ゆき梅乃文あくはるをいふ花見

前大納言為氏

花見の山花乃梅まをいふ山人の白や

百首歌より時 六条内大臣

白やの山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

山人の山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

山人の山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

山人の山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

山人の山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

百首歌より時 持大納言仲純

白やの山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

題よりす 平貞時卿也

山人の山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

前大納言俊光

山人の山人あくはるをいふ山人の梅をいふ

百首歌より時 内大臣

花のよはり言やそ細山尾の清は松を

邦有親王

葛城やう回乃鹿之こまてよそみぬ花のよ

永元百首并なる

入道前右政大臣

山傍花乃外乃るふひそ花をうらふ鹿乃り

百首親王の回 二品法親王賞助

花のよはり言やそ細山尾の清は松を

花のよはり言やそ細山尾の清は松を

海山本のよはり言やそ細山尾の清は松を

徳治二年三月平合目

左大臣

力にまはりの清は松をうらふ鹿乃り

由殿乃梅とる平前より人伝る時左の

花のよはり言やそ細山尾の清は松を

左大臣

いふくのや并れ梅乃れは松をうらふ鹿乃り

百首言なり耐 前関白右政大臣

百首やいなり花のよはり言やそ細山尾の清は松を

故卿花と 法皇所製

真のじりもれも咲花のそら世の書

今上りまふこの文を申候時御書

一ノ首弁の中の花

花中納之為藤

うほも花の真われと貴母の花信

五十首弁の中の花

後鳥羽院御製

花の中は咲の真われの書

入道三木親王性助

花の中は咲の真われの書

花の中

源氏朝臣

真のじりのまれは又立之花の白雲

天徳四年内裏弁合は梅

中務

花の中は咲の真われの書

花の中は咲の真われの書

花の中は咲の真われの書

花の中は咲の真われの書

源氏朝臣

花の中は咲の真われの書

花の中

お題一守

平宣時物長

今年もこれ山梅もさう盛りの家なり

前大納言の家

花とみく謝じりも之吉野の山梅うさめみん

公安百首平なりけり時

安嘉門院口條

いそり人ともし御宿りにとられぬ花とみく

花弁中ふ 藤壺門院が將

いそり梅もあひ梅花うさめみん人信

あかん一しり候

このうら花のやれと人の心乃多浅うたためし

白川乃花見ゆて次の目よみ侍りり

権入細之長家

走りうらとゆむとさう花のむくのうらゆめ

歌不知 白河院御製

あつてまの梅とさう物と折てやうつる雲の日に

左兼平又頭補

けしきとくまわし山梅のまよ折てゆん

子五百番歌合 野更た長

いそり梅もあひ梅花の人の心とみり候

前大納言為世よりめゆり春日社三十首

秋中一は 民部口實教

誰も皆花より人なるも今日本山はよき人なり

お中納言定房殿より花下日書と

わらわらとよき花の 法中定お

あつらふるよのむ山人のうらもあつらふ花より

順助法親王

あつらふよあつらふる山櫻より新子の花の葉に

花よりの中よ 法中長壽

らふとよあつらふる山櫻の白ひらきよき山嵐

平宗宣初長

わらわらと花のつらきあつらふる山櫻の葉に

友原隆俊初長

わらわらとあつらふる山櫻の葉に

前大納言為氏

月のまたらとあつらふる山櫻の葉に

寛治八年八月高湯院より合よ梅

将中納言通後

五月のつらとあつらふる山櫻の葉に

花山院御製

花のよしの梅のうらみふ人よみてまをさる

太宰権帥為行

うらみそとくし梅よし梅られしあぢり家の

あえ百首歌より一詩花

前攝政左大臣

しとくふふのさえはつめれ梅の花は

しとく梅の花のうらみよせ給うら

今上御製

うらみそとくし梅のうらみふらふとく

花のうらみよ 仁和寺三宗法親王守賢

花のうらみよあつりし白雲もさるうらみよまはれ山風

正治二年九月十首奇合下落花

前中納言定家

うらみそとくし梅のうらみふらふとく

小野守右衛門定家よゆらてつらよ道行りけり

花のうらみよあつりし白雲もさるうらみよまはれ山風

并乳母

うらみそとくし梅のうらみふらふとく

天徳四年四葉奇合下梅

中納言朝忠

わたりとらぬそありとも梅記惜正抄のわけ

新編 母之

らる時 花のつらさ

よみ人

そはてとれりゆり梅花心つらさ

建保四年後鳥羽院 首之

時 系 議 雅 評

五月花らるくもぬぬ果とのまらるる山梅

名 何 奇 漢 方 乃 中 一

津守 園 助

梅花らるそも母の向ふおきり吹雪まはる風

惜 為 花 心 乃 心 也

九条 九 八 氏

お花のあぬ多きと力よるてまらるる山梅

百首 乃 時 入 道 前 乃 政 八 氏

別々なる花のあはれはるる後よるる

西 後 乃 心 乃 前 園 白 乃 政 八 氏

雨晴方折りの花の風きて露をたらしらる梅

花 秋 乃 中 乃 中 勢 乃 桓 明 親 王

まらる風とのまらる根つれゆきり花もあらる

後法性寺入道前園白家奇合下花下明

月

後惠法師

花下月とていづれも入るふえおとらん

後法性寺入道前園白家奇合下花下明

後頼朝

花下月とていづれも入るふえおとらん

源頼朝

大御言卿伝

花下月とていづれも入るふえおとらん

前内大臣 通

花下月とていづれも入るふえおとらん

山川は花乃がう海とみく

長之位氏久

らう花乃浪と若根よ吹くて月あそ海は山川の水

西園寺の花乃盛は申はりり

常盤井入道前を政有

思ひやふ心の花も池あはう川うりり此もあえん

西一

西園寺入道前を政有

今もすめりて海は接花うりり水のこりり

花終結しりり

源兼康朝臣

あまの文いふまゝあまのじふとておたすまふとて花の枝

源邦長胡長

吹風さうみそくそく山梅かとりく花の名も

平貞時納言

おのれさう我名おとくおんやゆき風は花のらん

平秋時

昨日の梢乃花この採り方羽字の風よあはれ白

前大僧正實超

りえらとあめ松のま風よのえ紗よて花のあ

池上落花よよめる

藤原泰宗

あまの文いふまゝあまのじふとておたすまふとて花の枝

新え百首あまのじふとておたすまふとて花の枝

津守国冬

梅花らり妙くそく野山あけけはのうら白雲

法中定為

風よりやう材の小梅花のこころも雪と海

文永二年内裏十首歌よ花に雪と

前大納言為氏

雪よの海よゆれ山梅うらう花のまのふけ

硯乃あるは橋と入て入道前右政大臣
伏見院御製

交向より南敷きたる道はぬ宿乃花の宿

入道前右政大臣

こころしうらさうひわうしんまもあふたのた乃

正治百首歌集のりりり時

後東抄抄政大臣

今日よ又と見えわら右乃花の宿とやといふ人

題とす

後鳥羽院御製

名野心もぬきとらてはまのたのえよむとあ

前大細言が家こふ百と寄徳行りり

長二住家院

ういもこの同の嵐あしとふとくく花の白雪

兼鷹二年四月内裏前合は橋

終起る又題季

いふおたれもあらそ山橋らわらと事し海ん

月花門は一や甲しり

常盤井入道前右政大臣

山里のうら人乃法もか一もあつて花の宿とす

永仁二年二月内裏前合は橋

坊々の時迄は親と有恩乃道親長

清ぬくはあはらけり心持もたつてはこれにせしめ

亭同花とそらゆとよませ給うけ

伏見院御製

うゆりすふつり花あつしゆく風とつらうん

世乃歌中よ 藤原門院少将

表紙と風よりのなよ世とてまほむとらうん

西園寺入道ある政官

神のうへにあぬあまきうあまけきまはれ花のう

藤原宗花不見人とそら心紙

大の十里

江とそらあけり宿は花のちりゆくまてうん

漁徳之家乃弁合よ

よみ人——子

常はね風を花らりぬんまきまはれあまき

みこの宮とりゆ一時的うせ給うけ

今上御製

まのやまはれゆきの花とらんをよみのゆれやの上

百首あまの一時前大納言有母

若くしてはてしなくまのあけ月あつちあかかん

二品法親王賢光

春月

平時村朝

後深草院

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

春月

昔のそ人もよき歌と云ふ山吹の花は
田舎とよき歌始りしもの

は皇御製

橘花のうらけいふ歌のうらけの歌よ秋風を
和元百首歌なるもの歌を

和元百首歌なるもの歌を

権中細云公啓

昔のそ人もよき歌と云ふ山吹の花は
昔のそ人もよき歌と云ふ山吹の花は

昔のそ人もよき歌と云ふ山吹の花は

川を流す水はよき歌と云ふ山吹の花は
川を流す水はよき歌と云ふ山吹の花は

後鳥羽院御製

歌を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は
歌を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

歌を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

前大納言為氏

松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は
松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

は皇御製

松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は
松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は
松を乃花衣をよき歌と云ふ山吹の花は

三葉入道御製

二葉より葉をとりておぼろのまきとて松より地

松より葉をとりておぼろのまきとて松より地

おぼろのまきとて松より地

海つなぐ家よお花のさびしきつらさよ

れ 仔細

我宿のけしきたのじぬのむきとて松より地

天徳四年四月東平合はる

中絶し初忠

はるよふあそびうらさしてねえよ世のつらさ

屏風の繪よねあそび乃くぬる所

平兼盛

常盤がら花とてゆかりお宿のねよあそびくさけら

新川守 大中長 結實朝長

梅花らりたよとてあそびはるはつとてあそび

藤原景徳

はるよふあそびうらさしてねえよ世のつらさ

實治二年百首奇し惜花

山階入道友を信

ふあそびうらさしてねえよ世のつらさ

題ふ知 石上長

續千載和歌集卷第三

夏歌

寶治百首哥下まのけり時首夏

衣笠四八帖

去流乃と仰る一物よ夏夜たのふもを成すけ

四月一日よまのけり

和泉式部

時と一花の法よを著してとて日よと仰る

卯月の比連揚と人の許よつるを付とて

并深津門

御覧のたよ心法もいよまてまよふも思ひたりたり

永久四年卯月も卯辰哥合し卯花と

左京左大臣

朝日山簾の里に卯花と仰る布と云ふなり

千五百番奇合し二條院讀波

非よつる卯月乃新くはなり山時をゆふけりて

江安百首奇なりけり時

式部院御

位乃の松の久しと都をまき里静かに一輪のみ

新川守

よみ人

物もくは致方おらげ杜鶴の浦に川をわたり

けしよ子に寄合は在原を

ふ山野の山初秋の霞を色あはれん秋霜よけ

題はしつ 前大納言云任

ふのうらやまのあつかりの町をまう人のこゝろ移れり

實は百首歌よりうらやま町待郭云

附はしつ 後深草院少将内侍

子規物言まうらう町をうらやまの秋をよめし

同十の歌 関白家新が持

的背はた夏の来るれを郭云はよらむ秋多引

赤元百首歌よりしつ 町郭云

前系議雅孝

つねくゆらむむ秋の町をまうらうの秋をよめし

百首歌よりしつ 赤元大納言

秋をよめ人まうらうの町をよめし

赤元百首歌よりしつ 町郭云

前関白太政大臣

けしよは人まうらうの町をよめし

夏寄の中ふ 前大納言師重

人まうらうの町をよめし

元百首方より河部云

前大納言後定

河部は後定をのそ男魂打るの月よ河部

たう一や

体院所製

那西は月よかか子親もつむじりとののえ

部一守

後原基後

あつたは月よのそいさうらうらうの

安江師

あつたは月よのそいさうらうらうの

伊路

杜宇わつとわつ月よのそいさうらうらうの

曉岡部云とつとつ

源道深師

あつたは月よのそいさうらうらうの

人の藤乃陰よ河部とつとつ

かりり

源道深

あつたは月よのそいさうらうらうの

夏平の中ふ

法眼行深

あつたは月よのそいさうらうらうの

権中納言者

まゐつるがよしうねり時をかくる程の程とるに

實は法百そ奇なりけりつそよ同部云

後醍醐院の製

教道又いさつらつし世にたゆつた所の所なり

前大納言乃世よりせゆし去日社世首方

中不 最厚乃定朔長

たはらにのそやぶ家部云しん昔にをつら

題しら奇 平宣時物占

部云一しとて思ひしつえくそら我少れ

注中長身下

初はれぬし中しやと守るあて同をたきしれ

津守國助女

いさゝかおしむ物故今に又まゐりし記おくしす

二品は親王首人助

あゝあゝの若きれも時をいれり二夜今をさくえ

百首初めはしつそよ

法皇御製

まゐりつるあゝのまじ部をあらん人かはくは

法中定為

まゐりつるあゝのまじ部をあらん人かはくは

永徳四年祐子内親王家齋合

年内約

約しつりし時きさうしつりし時

期不知

西行法師

約しつりし時きさうしつりし時

永保元年内裏しつりし時

東極入道前園白太政大臣

入内しつりし時きさうしつりし時

夜部をさうしつりし時

入内しつりし時きさうしつりし時

兼暦二年内裏後齋合しつりし時

約しつりし時

わけしつりし時きさうしつりし時

約しつりし時

後齋合しつりし時

約しつりし時

約しつりし時

約しつりし時

明方しつりし時

夏寄申す

前齋議雅有

冷麻山のりられたる戸を少り出くはくはくす
那す孫多し何事と事て前園白た大長と兼
的るよ事てたさわが郭云つ建るさ事すし何事
一曉時をと 前大徳正良信
曉の事れはよ一勢と時うく切水と事すふ
郭云わ事すつる事あり孫多し後ハミを孫多
時をわもたつ子の様やよ心持て切わけふの免
弘長二年 龜山院より首首は事むる時野

時を

山階入道た大長

郭云一とあふよ武就院の野とらうくわさわ
正治百首歌よりけり時
前中細云定家
河島云一とさくもさうくや依人の里ししとあふの
家并合し覇旅郭云とよと事
光明寺より入道前持及た大長
屋とらうくさくさくさく時を昔のぬわらう孫多し
源邦長親臣
郭云わもたつ子の様やよ心持て切わけふの免

五月ぬ

法眼慶融

のりよく遊むを此に平も行くたの道ぬか日ぬのえ
寛治百首寄なりきり時早苗

親部成茂

八月もぬかち苗よどあて神の宮人早苗うら
河石之良

時きぬかぬい多げすちち山田乃早苗よどあて
手丑百首款合よ 野文たた良

是の山もぬかぬい多げすちち山田乃早苗よどあて
法眼の涙とあゆみ理社十八きあよ

是の山もぬかぬい多げすちち山田乃早苗よどあて

二品法親王家早苗寄に早苗

津守國道

あまのうらぬい多げすちち山田乃早苗よどあて

前中納言経繼

ゆりくと花猫のあけ今まむりい多げすちち山田乃早苗よどあて
百首款よりとゆり申す

皇太后宮女俊成

あまのうらぬい多げすちち山田乃早苗よどあて

通稱善量とてついで

基後

神宗一昔れ人れ思ふ花立るれの時多し

平雅貞

凡そ神宗の孫えれれ神の喜うて白く記

百首ありし時権人納云定彦

獨のしあじなを過やせとて南さく時多し

卒首款ふもせ始りする

後鳥羽院御製

時多しとてさくつらつみの花らりしとて

嘉元百首奇なりし時郭云

贈後三位為子

ほくすあもれ神とわたりふ月とけし

久安百首奇なりし時

皇たる后字を文後成

此月とてしつ時なりし郭云

あえ百首奇なりし時郭云

昭宗の院一棟

郭云との月乃多時て村中

大月多しとて

五月五日 端午の節 海老の節 五月五日 神の浦に

津守 國助

舞の心もその心乃を心を著る所 五月五日

何れも五月五日

前大納言 為母

五月五日 五月五日 五月五日

百首歌 五月五日

山の井と海とみくらに流るる新入み 五月五日

池水 五月五日

指律師 實性

池水の行もみくらに成なり 五月五日

五月五日

大に宗秀

白粉と流るるみくらに五月五日

高階宗成 朝臣

五月五日 五月五日

百首歌 五月五日

五月五日 五月五日

題 五月五日

あふ納言 為家

五月五日 五月五日

五月五日

先の男と入道 前指 政忠

於思の汀の浪もまうのぬまの山に月ぬのん

月一四日 前大僧正道昭

水田より榊原の河乃若とておぼあつさるる月ぬのん

百首歌なり一冊 権中納言為藤

根河まよりみよの山にぬまの山に月ぬのん

若松百首歌なり一冊 前中納言定家

月ぬのん山にぬまの山に月ぬのん

千五百番前合よ 自ら大僧正支後成女

みよの山にぬまの山に月ぬのん

名所夏月とらふ山に月ぬのん

大僧正

おもしろくふとなく海ぬ妹松山乃并一冊の

弘長三年内裏百首前もりもり月

夏曉月 前大納言為氏

夏朝乃曉とての露乃まふうまの山に月

宿宿百首評りけつてよ夏月とらふ

夏の来とけと涼さくす月ぬのん

抄河也 中原師負朝臣

夏草花より世にけり

院沛製

今も花はよきよきも昔もよきよきも花はよきよきも

飛山院沛製

花はよきよきも昔もよきよきも花はよきよきも

山平入道前太政大臣女

法なりよきよきも昔もよきよきも花はよきよきも

前大納言為世人

夏草花より世にけり

敬原行房下

夏草花より世にけり

院沛製

風そよよきよきも昔もよきよきも花はよきよきも

前大納言後定

院沛製

夏草花より世にけり

院沛製

夏草花より世にけり

院沛製

夏草花より世にけり

新くはせわさるる治のまのよふにうたはるる

百首のまの一時 津守國を

堂よりみかろの清ありをたもあつるやとのあり

文永八年七夕白川殿を人々むとく

かして百首のまの一時 蚊遣火

前大納言為家

蚊遣火のまのまのぬねとわらわぬ宿もねる

夏三河の中よ 西文九大臣

りらどにえん人もあはれいひるに床なふり

寛和二年の真言念ふ

藤原惟成

心してうへもあつる梅子乃花のまのまを今も

弘長百首歌もまの一時

衣笠田大臣

山甲とありぬあつるまのまのまのまのまのま

源二位行家

川井のまのまのまのまのまのまのまのまのま

文永二年七月白河殿を人々むとく

て七首のまのまのまのまのまのまのまのま

前大納言為家

奥津浪言のそく 塩風乃みきふあつたの
實治百首ありけりつそよ夕大之

後漢院所製

つとむるそよみは夕大のそよ入日

弘安百首歌ありけり時

前泰議録清

一じつとそよめをしらぬ夜中抄を涼

百首ありけり時 入道お太政大臣

夕立のそよ乃村やふと夕のそよ

夕立や 後部成久

秋もさく晴つるそよ夕のそよ日影

中片祐賢

秋まわいそよ夕を夏夜や野の原

弘長百首ありけり時 納涼

前大納言乃氏

涼のそよ夕のそよ夕のそよ夕のそよ

中片入道前園白太政大臣

夕のそよ夕のそよ夕のそよ夕のそよ

建保四年百首ありけり時

前中納言定家

夏心よりの浦にさねり娘のしらくひり秋風

久安百首奇なりなり時

上西門院集

夏心よりの浦にさねり娘のしらくひり秋風

山崎入道大右衛門家の十首奇なり納涼

源急氏初長

かきつらぬ夜の志水いれなうと松とや海をせりいとお

なまき夏方中しよらんらん 為道朝長

夕暮のよれ平風よぬらと露もなまらぬ蟬のねん

新古今和歌集 雑言は所

きくふ後まじりけいなる山の梢よりく蟬のりり

百首奇なり時 大伴正道順

きぬの本もとよ蟬のけりて山崎源さねの下に

関白内大臣

けりわふ新瑞の梢あそとて蟬のけりともあぬりハ

前関白大右衛門卿

ゆげより秋まじり河津まよとくぬあし吹袖の松風

昭訓門院春日

わさそまき涼かりなりまきやゆげよまき秋の

寛治百首奇なりなり時六月後

冷泉右大臣

百首歌よりみゆり中
庭はに河せのあしあきのまゝとてゆくはては

水宗秋やきん御後にはさしきりし風の原
子五百番宗合は後を御後河製

河後河せのあしあきのまゝとてゆくはては

水宗秋やきん御後にはさしきりし風の原

續千載和歌集卷第四

秋歌上

百首歌よりみゆり中
時初秋乃てわを

いづれを行か神よまゝのたすく原一木の初風
れあしとて中務の宗子親王

と記されは流を滞るまゝのたすく原一木の初風
十五百番宗合は惟め親王

時白く萩の紅葉よ海ひきとつわらうを木の初
先明宗子入道を御後大臣

先明宗子入道を御後大臣

乃乃小秋風とく人ともれはの候書著あはら
百も奇事時 天の氷けきれいれき身年の二ふれん お中納言の相
中納言家持

セクのおれののすけいふのいふに月夜よや立たり

山邊赤人

たるとセクつあふいひのあふのあふはるあな

其子院方合よふみん一守

天のさうしてほそセク乃わうたやせむいさるん

飛山院位はおましくはる時七月さるん

其はセ首ありされりふふくさうりさる

前大納言の家

浪河院のいふあふセクれおあや升はわん限

家乃六百番奇合よ乞巧集

後系極指政前を政大臣

身合のさ乃えとけり物たや升のたよあふさうり大

セクのおふと 前大納言の家

織女の露乃あれむううつ秋はてじふふあふん

八日前裁の露をさうりやめては成寺入道

前大納言のりふつうふふと

選子内親王

あふたてなりけり指とあひさうあふのあふあふらうあ
文

弘安百首歌なりたる時

入道前を改た后

明やげの河と乃浪の立海り又神やまあまの御衣

むしう守の源兼氏別名

ヒタのやれ衣氏や風は神乃乃はまを海に

同月セタミとて前中納言定房

其あひてあまの月の歌うり今あむをそとの門を

大神文よりしそ給たり中納言との事

後を神院御製

神歌乃をいそ兼系山風よむおとけいおそ

むしう守

いつる歌よむいじり神歌もいつる歌乃歌の上

正法百首をなすむしう守の時

前中納言定家

其うりまむもその新衣を束守風の秋乃夕

千五百番を合ふ二条院灌頂

いそ兼の表とていつるわれら宿の歌の上

述懐百首歌よむむしう守の歌

皇太后を更後成

秋神の歌よむいそ兼の歌よむむしう守の歌

寛和元年八月廿五日

花山院御製

秋の葉をよけ白鳥をよそと神をよそと

秋元百首一首

持中納言公雄

口を秋夕の露の露乃を長に涙をえりて秋風を吹

秋一草

法眼慶融

吹じよ秋の葉をよそと秋の葉をよそと秋の葉

秋安百首一首

入道お太政大臣

夕暮の秋の露の露乃を長に涙をえりて秋風を吹

弘安八年八月十六日

前大納言乃氏

秋の葉をよけ白鳥をよそと神をよそと

秋一草

依見院御製

秋の葉をよけ白鳥をよそと神をよそと

後二条院御製

秋の葉をよけ白鳥をよそと神をよそと

前中納言定資

秋の葉をよけ白鳥をよそと神をよそと

輝舟の中よ 二品は親王賞賜

とよはゆらうらむとていふはむいひのともは秋の夕

前大納言経長女

物あふぬ人のまゝもあはしんうき身ひつりの秋の夕

平久時

いふせん物あふ秋の暁はほそく落うは秋乃夕

赤元百首奇なりとて

右政大臣

をのつら涙のまよも秋神は露やいとぬ秋の夕

建暦三年内裏詩秋合とては秋夕

後久我右大臣

水は涙の夕は草下露や秋なく床乃る夕

遊義門院

嫌はぬ秋の暁や草葉やうはり秋夕露と秋

名所百首奇なりとて

前中納言定家

秋の夕は林のさうけはかりり床の草葉の露と秋

麗景殿の落よじとひ付たり

九条右大臣

秋の夕はもつら花をいふは秋夕風とて

題一守

津守國道

花すききう候もさる病の神をみたり秋の夕風

照り梅蘭と早事や

前信玄道性

取らぬ河句せんともみ捨て時をわたり庭溜りま

天慶八年仲屏風より

源公忠綱下

秋の野はあつくはなれはゆえにゆえにゆえにゆえに

夕暮のよはらに花をすすむいと入るは

いよとよまつかき秋の花よきうてさうく

取らぬのうとせき機を新院よりとすと

てられは紙を半付さけり

ふみ人一守

ふみの人れ花乃句いと珍まのそよのちやうあり

選子内親王

いほく乃花さうりに句やも時原の風れまのち

前代崇徳天皇

我常の庭乃秋花咲みたり物とく病乃さうり

邦有親王

さる病の病をわたりて人の袖つと衣落せふら

延三位氏久

みまぐらにみまぐら人のみまぐらにみまぐら

延永元年和神前之首奇よ朝奇花

延二位家隆

我神と相見りあやむ河川ゆききの雲の影は白

延一守

よみ人し守

我神と相見りあやむ河川ゆききの雲の影は白

万神門院

羽多くまくとみまぐらみまぐらみまぐら

野森と

友原為定物作

神よとみまぐらみまぐらみまぐら

百首歌めまぐらつてよ

延中御製

高田の野への輝風吹きまぐらまぐら

名不百てみまぐらみまぐら

僧正行意

まみまぐらみまぐらみまぐら

延一守

大納言孫人

まみまぐらみまぐらみまぐら

後徳太子在る所

思ふに... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

秋... 鹿乃... 鹿乃... 鹿乃...

前中納言經繼

秋の夜もよそよそしく
月影を照らす
法中定為

ささの尾上は
松乃風とあぬは
行念法師

秋とさう
中務卿宗尊親王

小倉山界の
月下庵と
後河内院
典侍

浅底の
山と
山と

前大納言經房

月影は
封月岡麻と
平貞時好長

山あり
藤原景徳

山あり
藤原基任

月影は
正安三年八月十六日
秋内裏十首

曉月園席川 左大臣

ト云ふと云く秋と云ふ年一秋席のつねと云ふと云ふの
赤え百首歌なりし時席

入道前右大臣

花と云く此のたふしけ秋寄のしり野の事と男席の

前大納言

小山田乃唐立くは秋寄にゆり人ありて秋寄のしり

百首歌なりし時三品法親王覚物

秋寄のしりと云くは秋寄のしりと云くは秋寄のしり

田家解と 権僧正担守

山田より賤く秋寄のしり又席のしりと云くは秋寄のしり

園光漢入道前雲白大臣

秋寄のしりと云くは秋寄のしりと云くは秋寄のしり

山麻といふる心秋寄のしり

法皇御製

秋寄のしり秋の表と云くは秋寄のしりと云くは秋寄のしり

赤え百首歌なりし時可杖門流

帝席のしりといふは秋寄のしりと云くは秋寄のしり

平宗泰

秋寄のしりといふは秋寄のしりといふは秋寄のしり

前中納言李雄

まに又候とてしづきたるに麻の着成り

藤原門院少将

思ふにりつゝこれ風は秋をく水もこれ麻の着成り

弘安百首歌り

龜山院御製

秋より麻をく時之にお秋も下葉の文ももつた

初序と 二位行歌

秋の之の露の白より玉つらん今や井の底も

蓮生法師

鷹のそ秋のよ葉は色付の秋神ももつた

平宗直御長

山風乃のむら秋のよ葉に秋もてしづきたるに

屏風歌よ 躬恒

無とらひと秋のよ葉のむら秋のよ葉に

人磨

比がよや井の底ももつた秋のよ葉に

十五百番歌よ 後鳥羽院御製

物やあやせしづきたるに秋のよ葉に

百首歌よ 時 権中納言為教

舞風よまうつ書きわめんきふまりの衣くら合

霧中雁と 園光院入道前田右衛門

秋山の麓とめらつ夕まきうにうはくまの初鳥の羽

書とよめれ 藤原宗秀

穿と海と室乃の時の秋風よ抄りて山に燈りけり

大に頼重

あり衣と夕の書はまきり尾花の神よ落と抄

ふみ人守

今由よ抄原の書は下あよ候うそと神あおき

は下定お

日影をす歌乃花は文くよ落とひねて晴る朝書

弘安百首歌年一冊

前大納言長雅

まごめ日影へ山に花より書の歌よ抄るわさか

歌一冊と

永福門院

うらじまて舞とくろ山人のゆはるを時への夕

文永二年八月十八日五首奇合よ末お

月よふと紙 権中納言公雄

一人のけいじやあふも山のわさか月をさる

先後物伝よ事せ侍らる百首歌よ

友惠澄祐朝臣

夕之れ月約をても物そふまのそを此秋の山の端
人月侍代はみ侍多と扱はせ

友原実守朝臣

法もよゆ月とまひて物そふまのそを此秋の山の端

新不知

前大納言為家

輝風よ等切や成おやそ物そふまのそを此秋の山の端

入道前右政大臣

まふつら山とわくまふの尾上の松月せい

伏見院法はれましく多時月十五

めまわ中に

前大納言為世

昔もまれそふ光いふつらひそる願やね秋のよ

月乃秋の布ふ 氏部々実教

山乃端のくられやそ新みそをこれね秋のよ

前園白右政大臣家澄

若らぬ物そふ光いふつらひそる願やね秋のよ

信實朝臣

夕秋の嵐は海成そふんおそる山あ

堀河右大臣

夕秋の嵐は海成そふんおそる山あ

性助は親王家の十首歌よ

法眼源兼

清光の屋上の月いさむとてふ門をよ。秋風うさ、

題一とく

紀淋氏朝臣

是白乃先師のゆゑに影なきに松原とわが秋の葉に

津守國夏

天津丹中吹流のまじゆかりの神方山乃秋葉月影

平貞文

面晴る候の神倉の板石より月をとりては神の影

二葉を白とる松文持津

去月山より乃風の中候て無月影を昔秋の心

洞院攝政家百首歌よ月

伝実朝臣

中より秋晴しより秋風より秋の葉の月をよ

和元百首歌よ月

津守國冬

とそふとよとては秋の心よとよの月乃秋の浦月

百首歌よ月

中を居るを夫後成

月とみく千甲のぬとあすまのうらりや白川乃と記

月と圓月をのびるは権中納言の友

秋の秋の月の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

中交の秋の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

くすくすの秋の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

白くくたれの秋の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

秋の秋の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

と秋の秋の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

ゆゆしく中交の秋の戸をゆるぎてゆくまじりては月の秋

今上御製

青み輝のたふ乃月秋を思ひゆくまじりては月の秋

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

續千載和歌集卷第五

秋寄下

月不撰如とさうらるを

大納言作信

久望乃さふらわら秋の月ついでに里をのびみ

きしらす

徳倉志長

月みこい衣ひさし更紗やとほ心の界れ秋風

嘉元百首歌にてありし時月

入道前右近

けしこまきしらすの月あけの月あけの月あけ

氏初卿奏教

池より人のよめる秋乃月とほけとけけとけ

月乃奇抄

前大僧正實義

いしりてなとらえをわらわ乃の末は月をさるん

よみ人

別くうきりえの月乃あやなれ梅のなとけらん

百首奇抄

法皇御製

亦也よ秋の心とされゆり亭を待く山乃端の月

前大納言為世書津守新を徳倉志長

殷留門院そ人々百首新よりみ侍り侍
月報之侍侍り 前中納言定家

こるをのむらうの月とそ心うむらうのむらう

何月と

平維貞

大井の水をむらうそあきて月よあふくあけり侍

新元百首新侍り

前中納言定家

月とそあふくの海水を晴く月報さう一息侍侍り

侍二位新家人より侍り侍り侍り侍り侍り侍り

合よつ上月

前中納言定家

任の乃むらうむらう侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り

寛元三年長月の以位侍り侍り侍り侍り

月とそあふく侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り

西園寺入道前中納言

侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り

建治三年九月十二日

前中納言定家

侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り

侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り

侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り侍侍り

半春時初長

海月の波路の美人のあはれ月をうら

百首歌中一時 権中納言為兼

まじ月の影さうて入はる若ふ舟娘月さう

江月さうて入はる 後二條院御製

ゆきあつ森のうら風打をた入はるまじ月の

◆百首歌中一時 中勢の宗考の歌

史のけん松風さうて入はるまじ月のあはれ

道助法親王家の百首歌は秋中月

前中納言定家

あつあつ秋の風さうて入はるまじ月のあはれ

百首歌中一時 法下定家

つら海乃のうら風もあはれ月をうら秋の浦風

たふ長家詩歌合は月前眺

丹波忠守初長

あつあつ浪の子あはれまじ月のあはれ

後大納言冬教

伊勢海や塩風さうて入はるまじ月のあはれ

山階入道たふ長家十首歌は月

律守回助

浪くぬや海のさかちとてわさるる月乃新

在柳月さかちとて

観意法師

高き昔よりそ難けりむしうらる月乃新

高き位者社よりうらる十首歌中より海邊月

前大細と為氏

那波浮浦よりうらるの月影は海をへそぬ清き清き

家五十首歌よりみゆらるる山家月と

入道二品親王道助

まふもわらわぬ月影は山家月影の如し

新しう

承鎮法親王

熊もたこの山風はさそ月影は心とあはれ

前大細と為世よりせゆらるる月影と

事とよみゆらるる法下長壽

あきおらう我馬の若れりやみのまふ月影

初元百首歌よりまふる月影

法下定房

心なむけや抄る秋の風はまのうらる月影

今上作よりせまふらるる後撰持信より

らして二回よりらるる後撰持信より

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

大炊師門の政宗

清のよみほめてとれた時の急ぎを月かき

百首あはし一対 前大納言後光

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

前大納言後光

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

海上月と 素還江師

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

月乃入の月のしづかにのちのちの松原の

しづかに 藤原実方親古

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

後大炊師製

神のよみほめてとれた時の急ぎを月かき

お道お古

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

藤原景徳

あつねの月のしづかにのちのちの松原の

源順

差取

まじりのそとまじり月打もやむりく虫のね乃る

建治三年九月十三夜五首詠一野虫

大新江流博

おれらる連とつまは林の野よせぬら虫の詠と

題一らす

前物政たな

は言しそしのじり人よあさ宿よえれ事とね松虫え

百首詠一野 昭訓門流去日

あくしつとみあ松虫のらとらを孫よん

前大納言為家百首詠

はくしつとみあ松虫のらとらを孫よん

草の原らるる松は松風人よむ松心松虫の詠

夕虫と流ゆら 神祇伯顯仲

夕虫の詠や乃蒼まらるの志よけやや

弘長百首言なりもら時虫

前大納言為家

まじりのそとまじり月打もやむりく虫のね乃る

関虫とらるる 今上御製

あさつとあさつたあつとあつとあつとあつとあつと

乞一らす 氏上実教

心もらたらるるあつとあつとあつとあつとあつとあつと

春宮守文公賢

いづれやうしつしつ兼原とさうしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

兼虫

兼原兼任

おしよしつ兼の兼もれしよしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

久くしつ兼の兼もれしよしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

久安百首奇なりし時

後九条内大臣

後兼元の兼もれしよしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

兼虫

久安百首奇なりし時

いづれやうしつしつ兼原とさうしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

久安百首奇なりし時

いづれやうしつしつ兼原とさうしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

久安百首奇なりし時

皇太后宮右史信成女

いづれやうしつしつ兼原とさうしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

久安百首奇なりし時

いづれやうしつしつ兼原とさうしつ兼の兼也
兼人納之為兼もせゆし之首奇し。

久安百首奇なりし時

光の華寺入道お持の衣

お内証の着せよ湯の山乃事畢た秋風より

和元百首歌なり時掛衣

法中定為

る園の庵をこしは秋風は神つゝ衣れよりん

里掛衣 法眼慈登

秋うまらぬたの里人かた秋意に衣れり

むらさき 友原歌盛

尾花少かり落しむ秋風よりあふ衣れり

百首新なり時 日久直

真の月とて秋みり時のお月とて心よりん

秋奇中尔 参議雅行

深草や寺の朝よれ行てわたりし里に在り

和元百首歌なり時掛衣

前大納言後光

遠き衣うけりる里人の書しむおきり心けり

同掛衣とらふと今上御製

いそりり秋のふたの暮さす秋の民れ心けり

弘安百首歌なり時

入道前右大臣

衣さじりかみ決すのあまんとしる風振し衣るん

海を揚衣と 大に貞重

秋さじりかみの浦に河戸人の波に衣るぬ書家

前大納言為家人くまも守也坊より日吉社

中首親合し湖を揚衣

前大納言為氏

と浪もあまのわすれのお道衣る風さじりかみ

寛治百首親よりきり時中揚衣

白土后実る更後清女

わすれかみさうぬまはれ振るき道治とて衣る家

揚衣舞る夏よりさし

伏見院御製

やうらうと秋の音ふさ衣衣のやうらうと秋の

新しらす 特義門院

うらうと秋の音ふさ衣衣のやうらうと秋の

百首親より時 忠侍親王

秋衣月さう人のぬきうらうと秋のやうらうと秋の

揚衣とよめり 源神長初占

秋衣月さう人のぬきうらうと秋のやうらうと秋の

後二位宮子

後う山よきの石の音れも 殊乃好まは御衣
の可く方なり時 前僧正も雅
おまうもあそふ山ん白露の映り此麻の袷衣
の安百首歌なりし時

大藏院啓

神のうの露もさう 杜風は行くあまのあふ境

飛山院法製

秋うは秋の目殺とさうつて 秋の悲れくはなを

此物に親王家乃也十首并し

法眼源承

白菊の神乃我若月さそいし 秋さむいし山衣小

久安百首さうし 白石后多字又傳成

山の山衣さうさうおさし 甲ささくみろ白菊の花

也秋の菊合は 藤原真房

地りささ花さした時のむされいし山衣さうの指くさる

雛菊を 二品法親王覚那

秋ささ雛の秋のさぬさう 老とぬ物さ白菊

菊行さうけくささせはさうさう

今上御製

仙人の子をせれ梅とゆつり 善く君さあささけり

白菊

入湯遊しは中河製

ひまたは長月の菊枝は雪のふせとまのり

市湯のふと 新流別當典侍

竹中志の枝とわらわて九平にふせとまのり

野一おと 永福門院四侍

後うら海の日野とまのり

百首守まのり 前田口尾大臣 押落

秋神の病とゆて長月や末野の尾歌うし

野一おと 平時敷

長月と末野の尾歌うし

秋部成文

下流のうじつはまのり

洞院持政前大臣

は乃國のと日れたの物時あ

前田大臣通

海くまのふせとまのり

紅葉一樹とまのり

前中納言経継

いふとほそまのり

横中納言為前

おほいの通れゆくものもみち遠を人おぼして

百景歌より時 関白内大臣

病の時より海くちあふ山もみち本糸の糸よみぬ

前巻縁雅存

時ぬゆき乃きまは日歌を綿をうらす夜のおま

錦舟中一 松津細云雄

小倉いぬよりしきみちをくまのぬれぬ多やゆき

流之位乃信

おのれのひらり山乃おまをくまのぬれぬ多やゆき

家と新合一ゆきり紅雲を

錦ん

修理定頭存

名もれ海心くれのおまをくまのぬれぬ多やゆき

題不知 清原元輔

おまをくまのぬれぬ多やゆき

昔之

みちをくまのぬれぬ多やゆき

出づおまを 後二位家隆

純白河よりのおまをくまのぬれぬ多やゆき

おまをくまのぬれぬ多やゆき

贈後三位乃多

りふしぬらりふふふも

久米百三郎 上西門院書

の日はあまとい思はれりん

後京極 拾段内大臣

方ふみゆりり

前中納言定家

松平の母は

22

...



